

平成26年度研究成果報告書《平成26年度教育課程研究指定校事業》

都道府県・ 指定都市番 号	16	都道府県・ 指定都市 名	富山県	研究課題番号・ 校種名	1 幼稚園
研究課題	幼稚園教育要領第2章に示す領域のねらいの実現状況及び課題等を把握し、その趣旨等を実現するための教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究				
ふりがな 幼稚園（園児数）	とやまだいがくにんげんはつたつかがくぶふぞくようちえん 富山大学人間発達科学部附属幼稚園（100人）				
所在地（電話番号）	076-445-2812				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	www.fzkk.fuzoku.u-toyama.ac.jp				
研究のキーワード	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児がしている体験の意味 ・ 幼児の体験のつながり ・ 幼児の育ちと体験 				
研究成果のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日常のあらゆる遊びの場面から、幼児がしている体験の意味を多面的に探ることができた。 ・ 様々な状況の中で幼児が体験していることを分析していく中で、一つ一つの体験が学びとなり、次の場面で生かされていくことを目の当たりにできた。 				

1 研究主題等

(1) 研究主題

子どもの体験を支える ～子どもがしている体験の意味を探る～

(2) 研究主題設定の理由

本園では、前年度まで、『豊かな心をはぐくむ』というテーマのもと、幼児の内面の高まりを支え得るより確かな援助をもとめて5年間、研究を行った。その中で、幼児は幼稚園生活の中で多様な体験をするとともに、一つ一つの体験は独立したものではなく以前の体験と関連をもって目の前の姿となっていることを実感した。幼児の体験とは単にその時その場のみのものではなく、そこで味わった思いや感情といったものも含めて積み重ねられており、これらのことが充実した幼稚園生活となるか否かに大きく関わるのではないかと考えられる。また幼児にとって今の体験がどのような意味をもち、次の歩みにどのようなにつながっていくのかを見極める力は、保育者の資質向上に関わる大切な視点の一つである。さらに幼児が多様な体験をすることができるようにする、先の様々な体験を関連させて幼児の成長を促す体験としていくことも保育者の資質、ひいては保育の質を高めるために重要であろう。

そこで今年度は、「子どもの体験を支える」という視点から研究を進めていきたい。また副題を「子どもがしている体験の意味を探る」とし、その体験が幼児にとってどのような意味をもち、次へとつながっていくのかを丁寧に分析していくことで、幼児の内面理解を深め、内面の高まりを支えていく援助を探る手だてにしていきたい。

(3) 研究体制

- ・ 研究主任を中心とした全教員による園内研究体制で研究を推進していく。

- ・富山大学人間発達科学部教員を研究協力員として連携を図り，専門分野からの意見や助言を積極的に取り入れていく。
- ・5月に行う2回のオープン保育，6月の保育フォーラムには，大学からの研究協力員だけではなく，公立・私立保育所や幼稚園，附属・公立小学校からの協力員にも意見や助言をもらい，学び合う。

(4) 1年間の主な取組

平成 26 年度	<p>4月：今年度の研究の方向性の共通理解</p> <p>5・6月：前年度の研究成果の発表と今年度の研究テーマに基づく公開保育 ・オープン保育 ・保育フォーラム</p> <p>7月：保育フォーラムでの学びの共通理解，園内公開保育研修会</p> <p>8月：文献研究，7月までの実践事例のまとめとそれを基にした保育カンファレンス，9月以降の園内研修についての共通理解</p> <p>9～12月：実践と保育カンファレンスによる研究の推進</p> <p>12月：12月までの実践事例のまとめとそれを基にした保育カンファレンス，本年度の研究成果のまとめ</p> <p>1～3月：研究紀要の編集，次年度の研究の方向性の検討</p>
----------------	--

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

- ①幼児がしている体験に焦点をあてて幼児の内面をとらえる。また記録を蓄積しカンファレンスに生かす。
 - ア．きめ細かな記録の蓄積
 - イ．保育カンファレンスの充実
 - ウ．幼児の内面の高まりに関わる体験に焦点化
- ②保育者のねらいを明確にし，意図的な援助を行う。その際，幼児の内面の高まりが期待できるよう援助する。

保育のねらいが明確であれば，方向性をもって幼児に適切な援助を行うことができる。また，保育のねらいを明確にもっていると，幼児の姿をねらいに照らして見取ることができ，幼児の変容の背景にある内面を，視点をもって捉えていくことができると考える。そこで以下のようにねらいを明確にして意図的な援助を繰り返し試みていく。その際，ねらいとともに幼児の思いや願いを大切に，幼児の内面が高まるようにする。

 - ア．ねらいの設定
 - イ．意図的な援助の試みと見直し
- ③大学協力者と連携を図り，専門分野からの意見や助言を積極的に取り入れていく。また関係機関や県内の幼稚園・保育所・小学校の先生方と連携し指導助言から学ぶ。
 - ア．公開保育
 - ・5月 公開保育Ⅰ，6月 公開保育Ⅱ・保育フォーラム
 - イ．園内研修会
 - ・9月～12月園内研修を行い，助言をいただきながら成果と課題についてまとめていく。
- ④文献研究，他園の研究会に参加し学ぶ。

年間を通じ，様々な文献を持ち寄ったり情報交換したりして，学びを深める。

(2) 具体的な研究活動

- ① 幼児がしている体験に焦点をあてて幼児の内面を捉える。また記録を蓄積し、カンファレンスに生かす。

幼児の内面を確かに捉えるため、幼児の姿をできるだけ細かく記録し、行動や言葉等の事実と事実をつなぎ、考察してきた。

<年長児 5月「新幹線作り」の事例より>

好きな遊びの時間、A児は「新幹線を作りたい」と教師に言う。教師が「いいね。どうして作りたいのかな」と言うと、「だって（保育室の）海にお客さんを連れてきたいから」と答える。

2人とも笑顔で話していると、近くで遊んでいたB児が様子を見に近付いてくる。教師が「A君、新幹線作るって。一緒に作ろうか」と言うとB児は頷く。2人はA児が提案した通りに、段ボールカッターで段ボールを切り開く。B児が段ボールを切ることに関心していると、A児は「僕がやってあげるよ」と笑顔で言い、手伝う。出来上がった時、A児とB児は「できたぞ」と声を上げて喜んだ。

(カンファレンスより抜粋)

始めは教師と2人で始めた新幹線作りだったが、途中でB児が加わってきた。A児が段ボールの切り方を提案した時にB児に受け入れられたことで、A児はB児を「一緒に遊んでいる仲間」として意識し、さらに段ボールを切ることに関心を貸す姿につながったのではないだろうか。

(この場面でのA児の体験)

- ・自分のイメージを教師やB児に認められ、安心し、意欲が高まる。
- ・B児を助けることができた自己有用感を感じる。
- ・自分がイメージしたものを作り上げた達成感を味わう。
- ・B児と遊ぶことを楽しいと感じる。

※A児の記録をさらに継続し、体験のつながりや育ちについて考えていく。

- ②ねらいを明確にし、意図的・継続的な援助を行う。その際、幼児の内面の高まりが期待できるよう援助する。

ア. ねらいの設定

- ・幼稚園で過ごす3年間を15の「期」に分け、その期の姿を踏まえ、その時期の保育のねらいを設定する。
- ・幼児の経験や育ち、個性、興味や関心、思いや願いなどの内面をしっかりと捉え、理解しながら、一人一人への保育のねらいを設定する。
- ・本園の教育課程に示す「期」の姿は、幼児の育ちの道標であり、あくまでも一つの目安としながら、目の前の一人一人の姿をありのままに受け止め、個に応じたねらいをもって保育し、記録・反省のサイクルを繰り返しながら育ちを支えていく。

イ. 意図的援助の試みと見直し

- ・「幼児の内面を捉える」→「幼児の体験の意味を探る」→「幼児の体験を支えるとは」という流れを大切にして日々の保育実践に取り組み、一つの「期」（約2か月）を目安に幼児の変容を確認しつつ、援助の在り方を振り返る。
- ・個または集団の育ちに関する日々の記録をとり、週ごとに育ちと保育実践を関連させて見直していく。

<年長児 11月「おまつり」の事例より>

C児の見取りと教師の願い みんなと一緒にする様々な遊びや活動を繰り返し経験するうちに、クラスの友達への『仲間意識』が徐々に高まってきていたC児。そこで次は、“今一緒に遊びを進めている友達”と、共にやり遂げたという達成感を味

わうことで、クラスへの仲間意識がさらに高まることを願っていた。教師はまず、たこ焼き屋の仲間との遊びが楽しめるような援助をしていた。

C児は、おまつりのイメージをもち、数人の友達と一緒にたこ焼き屋でたこ焼きを作ったり、コスチュームを作ったりしていた。ところが次の日からC児はたこ焼き屋の遊びをしたり、仲良しのD児が遊んでいる鉄棒のところへ行ったりして落ち着かない。

C児の見取りと教師の願い C児は、おまつりの遊びをしたい気持ちと仲良しのD児と一緒に遊びたいという気持ちの間で揺れ動いているようだった。

そこで、D児もクラスのみんなも巻き込んで、まつりの遊びを楽しみたいという気持ちが高まるようにしていくことで、C児が①自分のイメージを生かし、遊びを楽しむことができる②D児以外の友達とも遊びを進めていくことを楽しむことができる、と考え、援助の方向を変更した。

クラスみんなで集まった時に、教師が「おまつりのお客さんは誰なのかな」と投げかけたことがきっかけで、「他のクラスの友達を招待しよう」という目的をC児以外の友達も共有することができた。

C児の変容 最初はD児と自分のしたいことの中で揺れていたC児が、共通の目的をもってD児以外の友達と力を出し合って遊び、頼ったり頼られたりすることを通して、クラスの友達との仲間意識を高めていくこととなった。

3 研究の成果と課題

(1) 成果

- 日常の幼児のあらゆる遊びの場面から、幼児の内面を探りながら“今”体験していることは何かを分析した。事例ごとに全教員でカンファレンスを行うことで、その子の体験をどうとらえたらよいのかを多面的に探ることができた。
- 学年や場面等、様々な状況の中で幼児が体験していることを分析していく中で、一つ一つの体験が学びとなり、次の場面で生かされていくことを目の当たりにした。体験のつながりや育ちの道筋を確認することができた。

(2) 課題

- ・今年度は、多面的にあらゆる場面から幼児の体験を分析し意味を探ってきた。その中から見えてきたのは、教師の意図の方向性により体験の意味が変わってくるということである。今後は、ねらいや実態に即した保育となるように、幼児のしている体験の意味をしっかりと捉えながら、方向性を定めていきたい。
- ・体験のつながりをさらに意識した環境の構成が必要である。
- ・幼児の内面理解をよりの確にできるような記録の取り方も探っていきたい。

(3) 指定期間終了後の取組

- ・引き続き、事例から「子どもの体験を支える」にはどのようにしていけばよいのかについて探っていく。そこで、記録の取り方を工夫し、幼児の体験の意味やつながりをさらに丁寧に分析しながら、育ちを支えていく援助を探っていきたい。まず来年度は、環境の構成に視点を置いて幼児の体験をどのように支えていけばよいのかを考えていく。その後、具体的な援助の在り方を探っていくこととする。
- ・公開保育や園内研、保育のカンファレンスは今後も継続し、保育の質の向上に努めていく。
- ・3年間の研究の成果を踏まえ、教育課程の見直しを行う。現在の姿を基に、育てるべき姿を職員全体で共通理解しながら、5領域を意識した教育課程を編成していきたい。